

**発達に即応した教育課程の編成 「動き」に視点を
当てた生活単元学習の展開 : (生活単元学習指
導計画)**

著者	鹿児島大学教育学部附属養護学校
雑誌名	研究紀要
巻	3
ページ	1-182
URL	http://hdl.handle.net/10232/00008485

発達に即応した教育課程の編成

—— 「動き」に視点を当てた生活単元学習の展開 ——

1. 研究の立場

(1) 大テーマ設定の立場

① 教育に対する教師の構え

子供たちの実態を大まかに見ると、文字が書けない、自分の意志を表現できない、友達と遊べないなど、できない場面が多く目につき、何をどのように指導すればよいかわからないことがある。しかし活動の様子を細かに観察すると、ブランコでは一人で遊ぶ、自分の気にいったものには手を出す。自転車、手押し車などの乗り物には喜んで遊んでいるなど、興味・関心のあることに対しては、自ら働きかけようとする姿が見られる。ここに教育の可能性や糸口を見い出すことができる。

わたしたちは、子供たちの示す興味・関心、自らしようとする事などに目を向け、それを手がかりに、内容を分類し、いくつかの活動に組織し、発達に即応した指導をしていかなければならないことを痛感するのである。

さて、教育には、一般に社会的・文化的遺産の継承及びそれを創造していく機能と子供自身が持つ諸能力を発達させる機能とがあり、これが相互に関連し合って指導がなされていくのである。ところで、これまでの教育では、子供が持つ諸能力を精一杯発揮させ、その子自身の考えや、やろうとする意欲を大事にしながらそれぞれの子供を伸ばすことよりは、どちらかと言えば知的なものつまり社会的・文化的価値の面から指導することが多かったように思われる。子供の欲求やその子にとって指導内容はどうかといったことにこたえることが少なかったのではないかと考える。

そこで一人ひとりの持つ特性・欲求などを取り上げ、そこに働きかけることにより、心身の活動を活発にし、精一杯努力する過程を大事にしながら、諸能力の発達を図り、子供たちが生きる喜びを味わえる教育をしたいと考える。

② 教育課程編成の必要性

ア. 特殊学級から養護学校へ

特殊学級という小・中学校に属する一つの学級であったのが、養護学校となり、教職員の増員、施設・設備の充実、高等部の設置など教育条件が変化したため、小・中・高一貫した教育課程の編成に取り組まなければならなくなった。

イ. 子供たちの実態の重度化

特殊学級時代と比べて、入学してくる子供の実態が重くなってきており、能力、性格、行動などの様々な子供も増えてきているため、一人ひとりの子供に応じられるような指導内容、方法等の検討を行い、より適切な教育課程編成の必要にせまられてきた。

ウ. 養護学校学習指導要領の改訂

昭和54年に養護学校学習指導要領が改訂された。主なものとして次の点があげられる。

- 目標が、精神薄弱教育独自のものを改め、「めざす」あるいは「方向を示す」という観点から、他の特殊教育諸学校の教育目標に合わせてある。
- 各教科の具体的内容を5段階で示し、その内容は、上限は従来通りとし、下方に内容を考慮して改訂された。
- 養護・訓練では、重度の精神薄弱児の場合、必ずしも各教科を養護・訓練に替えるという考え方をとる必要はなく、代替措置をとらずに各教科、道徳及び特別活動等を合科統合して指導することもできる。

以上述べたような立場に立って、実践研究を進めることにした。

(2) 研究のあゆみ

昭和55年度

先に示した大テーマのもとに、昭和55年度は、特殊学級時代の教育課程、養護学校学習指導要領などを参考に、発達に即応するために、年齢を考えて、小学部低学年、中学年、高学年、中学部、高等部の5つに区分した教育課程を編成した。(これは、ひと月分を見開きの2ページの中に全指導形態について載せてある。)この教育課程は、月々の計画の主な内容を示すにとどまり、指導にあたっては、より具体的な計画を作成する必要があったので、各々の指導計画の改訂充実を図ることが課題となった。

昭和56年度

「動き」を生かした生活単元学習の展開

昭和56年度は、各学部とも実施している合科統合の指導形態である「生活単元学習」に焦点を当て、指導計画の改訂充実を図ることにした。その際、サブテーマを設け、教育課程編成の柱となる考えをきめ、それをもとに研究を進めた。

昭和55年度に作成した指導計画の反省、子供の実態(表情に乏しい、人になされるがまま、人とのかわりが少ないなど)から、もっと活発に活動させたい、そのためには、興味・関心を大事にして、身体活動をさせることではないかと考えた。また、フロスティグ著「ムーブメント教育」によると、身体活動をすることは、身体の諸機能の働きを高めるだけでなく、情緒の安定を図り、知的、社会的な面の発達を助けることにもなるという考えなどから、心の動き、身体の動きなどの「動き」ということをサブテーマに取り上げて指導計画づくりの研究に取り組んだ。そこで、「動き」とは、単なる身体活動としてとらえず、身体・運動機能の発達と精神発達との相互関係ととらえ、自発性の育成を図るために「合目的な動かせ方はどうあればよいか」という点から各学部では、次に示す視点を設けて研究を進めた。

<小学部>

- ① 意欲をもたせるための発達段階に応じた教材・教具の工夫

- ② 見通しをもてるための発達段階に応じた学習過程のパターン化
- ③ 人とのかかわりを持ち、経験を深めるための役割分担
- ④ 適切な発問や提示、指示のしかたの工夫

<中 学 部>

生徒どうしの人間のかかわり合いを深める指導のあり方

<高 等 部>

自ら判断し、行動する生徒の育成

(3) 昭和57年度の研究内容と方法

① 基本的な立場

56年度は、「動き」を単なる身体の動きではなく、身体・運動機能と精神発達との相互関係としてとらえ、合目的な動かし方はどうあればよいか、という点から研究を進めた。しかし、このとらえ方では、子供たちが自らするのではなく、させられると考えられ、指導者の意図が強く出るように受けとられるようなので、させられるから、するという方向で再考することにした。そして、人間は、人の中ではじめて人となるといわれるように、人々の生活する環境に目を向け、57年度は、次のように「動き」をとらえて研究を深めることにした。「“動き”とは、より生き生きと活動することをめざして、活動体（人）と外界（環境）との関わりを向上させることである。」

この考え方をもとに各学部は、次の視点から研究を進めることにした。

<小 学 部>

子供がより生き生きとした活動ができるための環境づくりはどうあればよいか。

<中 学 部>

意欲的に学習させる条件づくりと場の構成はどうあればよいか。

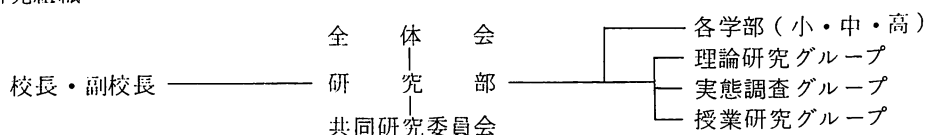
<高 等 部>

見通しをもち、すすんで活動する生徒を育成するにはどうすればよいか。

② 研究内容

- 昨年の「動き」の考え方を発達させ、より明確にする。
- 改訂した生活単元学習の実践を深める。
- 個々の子供たちの活動の様子がよくわかる学習指導案の工夫
- 子供たちの知能、運動能力などの実態を把握する。

③ 研究組織



④ 研究計画

- 4月 ◦ 研究計画立案，研究体制の確立
 - 一次案内状作成
- 5月 ◦ 研究構想の検討
 - 実践授業の決定，実態調査項目，授業記録の仕方の検討
- 6月 ◦ 各学部ごとの授業研究
 - 実態調査の実施，全体講師の検討
- 7月 ◦ 授業研究のまとめ
 - めざす子供像の検討
- 8月 ◦ 指導計画の検討，修正
 - 研究公開，指導・助言者，司会者の検討
- 9月 ◦ 研究内容の検討
 - 研究公開日程の検討
- 10月 ◦ 授業研究会（高等部）24日（水）
- 11月 ◦ 授業研究会（中学部）17日（水）
 - 授業研究会（小学部）24日（水）
- 12月 ◦ 二次案内状発送
 - 研究紀要原稿執筆
- 1月 ◦ 研究紀要印刷
 - 研究授業指導案検討
- 2月 ◦ 研究公開諸準備
 - 研究公開日（18日）
- 3月 ◦ 研究の反省と次年度の研究の概要検討